

杜甫における独善—最晩年の「南征」をめぐる— 下定 雅弘

はじめに

拙文は、杜甫の詩を白居易が確立した「兼濟」(公務の充実)・「独善」(プライベートの快適)の観点で読もうとする試みの一環であり、拙文「杜甫における独善—その食の喜び—」(『白居易研究年報』14、2013・12)、「杜甫における独善—その飲酒の喜び—」(『新しい漢字漢文教育』57、2014・5)に続く論考である。

ここに、「兼濟」「独善」の観念についての白居易自身の言葉を挙げておく。元和十年(815)十二月、貶地江州で元稹に宛てて書いた手紙「元九に与うる書」に、白居易は、自分がこれまでに書いた詩を分類してこういう、「拾遺と自り

このかた来、凡そ適する所・感ずる所、美刺興比に関する者、又た武徳と自り元和いたに託

る、事に因りて題を立て、題して新樂府と為せし者、共に一百五十首、之れを

諷諭詩と謂う。又た或いは公より退きて独りお処り、或は移病いへいして閑居し、足る

を知り和を保ちて、情性を吟詠する者一百首、之れを閑適詩と謂う。この次の段落で、本来『孟子』の語である「窮すれば則ち独り其の身を善くし、達すれば則ち兼ねて天下を善くす」(尽心上)に基づきつつ、「兼濟」「独善」との関係についてこう定義する、「之れを諷諭詩と謂うは兼濟の志なり。之れを閑適詩と謂うは独善の義なり」。

この定義において「兼濟」の意義は『孟子』と変わらない。諷諭詩は、左拾遺となって以来、職掌と公務に関連して、「美刺興比」即ち『詩経』の比興の思想と技法に拠って制作してきた社会の諸事象を讃美しあるいは諷諭する詩であり、それを支える精神は「兼濟」、広く民に幸福と安寧をもたらそうとする公人としての使命感であり、またその行為である。

だが、「独善」については、『孟子』の意義とは変わってしまっている。白居易は「独善」とは「閑適」だという。「閑適」は、この手紙の「閑適詩」の定義「公より退きて独り処り……」に拠れば、公務(皇権の領域)から離れている時の私的な時間・空間における快適であり、言い換えればプライベートの快適・快樂である。A=B、B=C、ならばA=C。「独善」とは、プライベートの快適・

快樂に他ならない。白居易は元和十年、「与元九書」において、この「独善」を「兼濟」に並立させる人生観を確立し、以後「独善」の内容を生涯にわたって無限に豊かに発展させていった。

白居易は後年、「丈夫は一生に二つの志有り、兼濟と独善とは得て并あせ難し」(『秋日與張賓客舒著作同遊龍門醉中狂歌凡二百三十八字』²⁹⁶⁸)と述懐している。杜甫は杜甫で「兼濟」の充実を生涯追求したのだが、詩において多数のすぐれた「兼濟」の志を示す作品を遺しはしたものの、実人生においてそれを果たすことはできなかった。そして杜甫もまたその苦難に満ちた人生において、生涯「独善」の喜びを追求していたのである。「独善」のその飲食における一端についてはすでに上記拙文二篇で論じた。

拙文では、蜀を出てからの杜甫最晩年における「南征」の決行に、「独善」への希求が深く関わっていることを論じたい。

1 南征とは？

問題とする「南征」が何かをまず明らかにしておく。これに対立するのは「北帰」である。北帰とは長安及び洛陽に帰ることである。

杜甫は、広徳二年(764、53歳)六月、嚴武の推薦により工部員外郎となり、翌永泰元年、赴任のために成都を離れる。成都を離れたのは頼りとする嚴武が亡くなったからだという説が従来有力だったが、これは陳尚君によって正された。⁽¹⁾北帰は、直接には赴任のために長安に帰ることであり、最晩年には、故郷に近い洛陽をも含めた北方に生きて帰りたい、それがだめならせめて襄陽にはたどりつきたいという願望である。

南征は、杜甫自身の用法からして大きく分けて二つの意味を持つ。一つは成都を離れてから湖南地方を漂泊することをいい、いま一つは大暦四年(769、58歳)、岳陽から、南方、潭州(長沙)及び衡州に向かうこと、また向かったことを指す。

杜甫は、北帰を目指して成都を離れたのだが、衰えた身体を考えると成都から陸路を取るのではなく、長江を下って「即ち巴峽よ従り巫峽を穿ち、便ち襄陽に下りて洛陽に向かわん」(『聞官軍取河南河北』⁰⁶⁰¹)と⁽²⁾、水路で洛陽及び長安に帰ろうとして夔州に行き、ここで病のためほぼ二年を過ごして、大暦三年(768、57歳)、江陵・公安を経て、冬岳陽に至る。本来、岳陽から漢水を溯り、漢陽(論文末附載地図の漢口)・襄陽を経て、北方に帰る予定だったのである。ところが、杜甫は漢陽には行かず、大暦四年(768、58歳)正月、逆に南方の潭州

に向かって舟を進め、さらに南航して衡州に至る。

この岳陽到着以前にいう南征は、例えば「秋日荆南にて石首の薛明府が満を辞し告別するを送り、薛尚書に寄せ奉る、徳を頌し懐を叙す、^{ひぜん}斐然の作三十韻」¹³³³に「南征客と為りて久し、西候君に別る初め（南征して長らく漂泊の身であり、いま江の辺の西亭で君とお別れする）」というのがそうである。これは大暦三年(768)秋、荊州（江陵）での作。この南征は荊州を含めて湖南に漂泊していることをいう。

大暦三年荊州を出る時の作「舟江陵の南浦を出ずるとき鄭少尹審に寄せ奉る」¹³³⁹に「溟^{めい}漲^{じやう}鯨^{けい}波^ぱ動き、衡陽^{けいよう}雁^{えん}影^{えい}徂^そく。南征^{なんせい}懸^{けん}榻^たを問う、東逝^{じやうふ}乘^{じやうふ}桴^ふを想う（行く手には大海に鯨が起こす大波が立ち、衡陽に向かって雁の飛ぶ影が見える。これから南方へ行き後漢の陳蕃が榻を設けて徐穉を迎えたように私を優待してくれる人を訪ねようか、それとも東に行き孔子のように筏に乗って海に浮かぼうか）」というのは、「南征」の句の前に衡陽が見えるから、衡陽へ行くことも選択肢の一つにあるだろう、東に行くというのは、わかい時に遊んだ呉越の方向を考えている可能性が高い。ここでは、どこに行くかは決まっていない。

大暦四年(769、58歳)春の作「裴使君に陪して岳陽樓に登る」¹³⁶⁴に「敢^{たが}えて違^{ちが}わんや漁父の問いに、此れ従り更に南征せん（漁夫は屈原に世と共に移れと教えた、あの教えにたがうことはできない、これからもっと南征しよう）」というのは、岳陽でさらに南方の潭州に向かおうと詠うものであり、北帰とは逆方向の南征である。

同じく大暦四年春、岳陽から潭州へ向かう時の作「南征」¹³⁶⁵に「老病南征の日、君恩北望の心（老いた病の身で南に行く時、心は君の恩を思って北を望んでいる）」というのも、明確に北帰と、岳陽より南に向かうこととを対句で対立させている。

大暦四年春、潭州の白馬潭から衡州に向かう時の作⁽³⁾「白馬潭を発す」¹³⁸⁵に「道^いう莫^もかれ新^{しん}たに要^いを知ると、南征^{なんせい}且^{かつ}らく未^みだ廻^{まわ}らず（ここで新しい知り合いが欲しいなどとはいうな、南征したらしばらくは帰ってこないのだから）」というのも、衡陽に行ってしばらくそこに暮らすつもりであることを言う。

拙文では、以下、岳陽から、北帰とは逆の南方に向かうこと、また向かった

ことを南征という。杜甫は、なぜ北帰のコースを取らず、南征したのか？その決断はいかにしてなされたのか。これを究明することが拙文の主な課題であり、それは杜甫の「独善」の希求と深く関わっていることを強調するのがその主内容である。

2 北帰の不可能と断念

杜甫が南征を決行したのは何か一つの理由によるのではなく複数の条件が関係している。

北帰を諦めたのは、それが現実に不可能だったことによる。長安及び洛陽に戻りたいとの思いの強さはいうまでもない。それは、以下に引用する南征を詠じる詩にも見える。死の直前の北帰は別として、この根源的願望を実行に移さなかったのは、ひとえにそれが現実に不可能だったことによる。

その理由とは、第一に病のために北帰を実現するだけの力を杜甫自身が持っていなかったからである。第二に北方が、吐蕃の侵攻によって、一時期は長安が占領され、平定されてもお戦乱状態が完全には収束せず危険だったためである。

第一の病について。杜甫の主な病は肺病と消渴^{きやく}と瘡^{さう}⁽⁴⁾と「風」の病である。

また、天宝七年(748、37歳)の作「韋左丞済に贈る」⁰⁰³⁴に「家人几杖を憂う、甲子泥塗に混ず（家の者は私のことを脇息だ杖だと心配してくれる、こうして幾つかの干支を卑賤の地の泥土に雑じりながら過ごしている）」というように、四十歳以前から脚が弱く、杖をつけていた。四十歳以後の杜甫にとって、歩くとは即ち杖をつくことだった。脚が弱かったことは、陸路を選ばず水路での北帰を考えた最大の理由の一つだろう。

肺の病が、現代でいう肺病かどうかは不明だが⁽⁵⁾、杜甫自身「肺病幾時か日辺に朝せん（肺を病んでいるこの身体ではいつになったら宮中に参上することができるだろう）」（「十二月一日三首」其一⁰⁸⁵⁴、永泰元年）というように、「肺病」の語を使っているのでこの語を用いておく。肺病の発病は、広徳二年秋(764、53歳)、成都でのことである。「唐十五誠に別る、因りて礼部の賈侍郎に寄す」⁰⁷⁹⁶に「我が為に賈公に謝せよ、肺を病みて江沱に臥すと（賈公には伝えてくれ、私はいま肺の病で錦江⁽⁶⁾のほとりに臥せっていると）」とある。以後、肺の病で苦しむことは大暦四年まで詩に見える。途中、大暦二年(767、56歳)に、「高秋肺氣蘇す（天高い秋になって肺が蘇った）」（「秋清」¹¹⁵⁷）といい、大暦三年に「肺肝若し稍く愈ゆれば、亦た赤霄に上りて行かん（肺肝の病がもしだんだんと治ったなら、宮城

の赤い空に上っていこう)」（「送潭二判官」¹³⁵⁰）とやや良くなることはあるが、結局死ぬまでこの病からは解放されなかった。

消渴、即ち糖尿病は広徳二年(764、53歳)春、成都で得た。「消中祇だ自ら惜しむ、晩起誰をか索めて親しまん(消渴の病を患って独り我が身を愛おしむ、こんなに朝晩く起きては誰に親しいつきあいを望むことができよう)」（「贈王二十四侍御契四十韻」⁰⁷⁴⁵）というのが消渴の病が述べられる初めである。大暦二年、夔州での作に「飄零仍お百里、消渴已に三年(雲安から百里余りの所に相変わらずさすらい、消渴の病はもう三年になる)」（「秋日夔府詠懷奉寄鄭監李賓客一百韻」¹¹⁵⁵）と、三年前に消渴にかかったというのは、広徳二年、成都でこの病を得たとの上の詩句と符合する。

消渴も大暦四年(769、58歳)冬、「長卿久しく渴を病む(この司馬長卿は長い間消渴を病んでいる)」（「奉送魏六丈佑少府之交廣」¹⁴¹⁶）というように、ずっと治ることはなかった。

瘡は、天寶十三載(754、43歳)の作「病後王倚に過ぎりて飲み、贈れる歌」⁰¹⁰⁰に初めて見える。「瘡 癘三秋孰か忍ぶ可けん、寒熱百日相い交戦す。頭白く眼暗く坐に臍有り、肉黄に皮皴だちて命線^{いのち}の如し(秋三箇月瘡にかかったが、その苦痛を誰が我慢できよう。百日ばかりも寒気と熱とが戦い合ったのだ。頭は白くなるし眼はよく見えない、坐ると膝にタコができる。肉は黄ばみ皮は皴だらけで細々と命をつないでいる)」。

以後、瘡の病にかかっていることは、乾元二年(759、48歳)の作「彭州の高三十五使君適・虢州の岑二十七長史參に寄す三十韻」⁰³⁴⁵、広徳二年秋(764、53歳)、成都での作「台州鄭司戸蘇少監を哭す」⁰⁷⁹⁵、大暦二年(767、56歳)の作「薛三郎中璩に寄す」¹⁰⁹⁷にも見える。

杜甫の詩には病を示す「風」—中国医学で「風痺」「風湿」といわれる病—が5例見える。広徳二年(764、53歳)秋、成都の幕中での作「悶を遣る、嚴公に呈し奉る二十韻」⁰⁷⁸⁴に「老妻坐痺を憂え、幼女頭風を問う(妻は下肢が麻痺するのを心配し、幼女は頭痛がしないかと尋ねる)」というのは、最も早い例であり、以後、「風を愈すは烏鷄と伝う、秋卵方に漫りに喫う(黒い鶏は中風の病を治すのにいいらしいので、秋の卵をやたらと食べている)」（「催宗文樹雞柵」⁰⁹¹¹、大暦元

年)、「卷耳^{けんじ}況んや風を療すをや、童兒且に時に摘まんとすと(卷耳の草は風痺の病にいいというから、私、時には摘んでみましょう)」（「驅豎子摘蒼耳」¹¹³⁴、大暦二年)、「風病を以て辞するを恥ず、胡ぞ然く湘岸に泊するや(風痺の病などということでは難局から逃げるのは恥だ、それならなんでこのように湘江の岸辺に泊まっているのだらう)」（「舟中苦熱遣懷奉呈陽中丞通簡臺省諸公」¹⁴⁴⁸、大暦五年)、「風疾に舟中枕に伏し懷を書す三十六韻、湖南の親友に呈し奉る(風痺の病で舟の中で枕に伏しながら思いを記した三十六韻、湖南の親しい友にさし上げる)」¹⁴⁵⁷(大暦五年)と「風」の病が見える。

肺病・消渴・瘡・「風」の病、主としてこの四つの病のために、杜甫は長期間苦しめられた。53歳以後はこれらが合併して杜甫の身体は蝕まれていき、大暦四年(768、58歳)清明節の時には、「此の身漂泊西東に苦しむ、右臂は偏枯し半耳は聾す(我が身は西へ東へと漂泊して苦しんでいる、右の臂は動かなくなり、片方の耳は聞こえなくなった)」と、半身不随の状態になっている。さらにまたわかい頃からの飲酒過多・水銀を含む丹薬の服用⁽⁷⁾・長い水上生活による湿気の影響、これらがマイナスに相乗して、杜甫は六十歳に達せずに死んだ。

この病が、大暦元年(766、55歳)、雲安で「病を抱きて金門を排す、衰容豈に敏を為さんや(病を抱きながらも金門を開いて朝廷に参上したいのだが、このやつれた身でてきばきと職務を全うすることができるだろうか)」（「贈鄭十八賁」⁰⁸⁶⁵）といい、大暦三年正月、巫山県で「病に臥して巴東にあること久し、今年強いて帰ることを作す(長らく巴東で病に臥していたが、今年は何としても故郷に帰るのだ)」（「巫山縣汾州唐使君十八弟宴別兼諸公攜酒樂相送率題小詩留於屋壁」¹³⁰²）といい、また大暦五年(770、59歳)四月に「報主身已に老い、入朝病みて妨げらる(天子のご恩に報いたてまつるべきこの身ももはや老いた、朝廷に帰ろうとしても病に妨げられている)」（「入衡州」¹⁴⁴⁵）というように、北帰を断念させる理由の一つだったのである。

第二の戦乱について。概況を述べる。吐蕃は広徳(763)元年、大震関(甘肅省清水県東隴山東側)から侵入、涇州(甘肅省涇川県)・邠州(陝西省彬県)・長武・旬邑・永寿四県)を破って、奉天(瀋陽)・武功(陝西省武功県、奉天の南方、東方の咸陽空港まで約50キロ)を攻め、唐兵は散り散りになり、代宗は陝州(河南省三门峡市、西安と洛陽の間に在る)に逃げた。吐蕃は長安城に入り、李承宏を唐帝に立てる。同じく広徳元年、安史の乱の際に、郭子儀と賊軍征伐をともに行った僕固懷恩が

宦官との対立から叛乱を起こし、太原(山西省太原市)に進攻する。さらに永泰元年(765)二月には、党項族^{タングート}が富平(陝西省富平県、陝西省中部に位置する)に侵攻する。このように北方の争乱は、この頃常態だった。

永泰元年(765)春、草堂での作「春遠」⁰⁸¹⁴にこういう。「^{しば}数しば関中の乱有り、何ぞ曾て劍外清からん。故郷帰り得ず、地は入る亜夫の營に(関中ではたびたび騒乱がある、どうして劍門の外まで平穏であることができようか。故郷には帰れない、故郷はいま周亜夫の陣地の中に組みこまれている)」。周亜夫は漢文帝の時の將軍、ここは郭子儀を指す。吐蕃討伐のために、洛陽は郭子儀の軍の陣地になってしまっているのである。

この年、郭子儀によって吐蕃・ウイグルの叛乱は平定されるものの、北方は一貫して不穏な情勢にあった。大暦元年(766、53歳)秋夔州での作「夔府書懷四十韻」⁰⁹⁵²にも「長吁す北寇^{ひるがえ}翻るに、一望西夷^ま巻く(北の曲者回紇がしばしば態度を変えるのにはため息が出る、見渡す限り西の蛮族吐蕃が席卷しているではないか)」という。戦乱のために北帰が叶わないことはこの他にも多数の詩に見える。⁽⁸⁾

病と戦乱と、この二つのうちでは、病が北帰を不可能にするより大きな原因だったろう。ことに永泰元年、吐蕃が郭子儀により平定されて以後は、杜甫がもし元氣であったなら、きっと北帰を決行したろうと思う。

なお陳尚君は、この二つにさらに、朝廷から何の音沙汰もないことを、北帰を断念させた理由として挙げている。⁽⁹⁾

3 南征への道程

あらかじめ結論を述べておく。南征を決行したのは、上に述べたように北帰が現実的に不可能であることを大前提として、二つの大きな理由がある。一つは、北帰即ち「兼済」の実現が不可能となった時、杜甫の心に、これまで抑えこんできた「独善」への希求が大きくふくれあがってきたためである。今一つは、生きるために生活の支援者を求めたからである。

「独善」への希求とは、二十歳前後に遊んだ呉越の甘美な思い出であり、わかい頃から深い関心を持っていた仏教と仙道への憧憬である。この三つの杜甫における「独善」の精神的なアイテムは次第に仙道に収斂していく。

杜甫は、北帰＝「兼済」の道が不可能と知った時、多年、心中に蠢いていた「独善」の願望を、最晩年、死ぬ前に実現させることに賭けた。これが、当面

の生活、生きることを保証する必要と結合して、南征を決断させた。逆に言えば、この逆境と苦難を利用して、杜甫は長年にわたる「独善」の志を実現しようとしたのである。

そして、生きる条件の確保と仙道の追求と、それが南征で果たされないとわかった時、杜甫は残る生命力を北帰に投入し、その投入の初めに、力尽きて死んでしまうのである。以上は巨視的に見た南征の素描である。

南征はなぜ為されたのか? 以下、具体的に見ていこう。問題はより正確に、こう立てられる。杜甫は、永泰元年(765、54歳)、工部員外郎を授かり、赴任のため長安に帰ろうとして成都を離れていながら、なぜ、大暦四年(769、58歳)春、岳陽から北帰して漢陽に行かず、南征したのか?

杜甫が南征を初めに思いつくのは何時、何処でだろう。

上元二年(761、50歳)、成都での作「江漲」⁰⁴⁶⁴に、南征に繋がる思いが見える。錦江の水が漲る壮烈な情景を見ての五律、その後半。「魚鼈人に得らるるを為す、蛟龍も自ら謀らず。輕帆^よ好し去ること便なり、吾が道は滄洲に付す(魚もスッポンも人に捕まえられるし、蛟龍でも身の安全を図ることができない。この水の勢いに乗り帆を軽々と揚げて船出するのがいい、前途は海上の仙境に託そう)」。

杜甫はわかい頃から、仙道にも仏教にも深い関心を持っていた。仙道については、早い例として「濁酒陶令を尋ね、丹砂葛洪を問う(濁酒を愛する陶淵明を尋ねたり、丹砂を鍊る葛洪を訪うたりした)」「(「奉寄河南韋尹丈人」0033、天宝七載、748、37歳)と見え、仏教については、「龍門奉先寺に遊ぶ」⁰⁰⁰¹(開元二十四年、736、25歳)・「夜許十一が詩を誦するを聴き、愛して作有り」⁰¹²¹(天宝十四歳、755、44歳)・「大雲寺の贊公の房四首」^{0156~0159}(至徳二年、757、46歳)等がその証となる。⁽¹⁰⁾

この詩では「滄洲」といって、具体的に南方を示す語はない。しかし、後に見える南征を思う詩が仙道の追求と結びついているのを見れば、これが南征への思いの芽生えの早い時期のものだと見ていい。

以下、南征に繋がる表現が見えるものを挙げる。各時期の主な特徴が一目で分かるように見出しを付けた。杜甫の心の動きを見るため、挙例は、制作時の順を原則とする。従って、見出しとは異なる他の要素も混在している。

3-1 東遊の願望とその消滅

広徳元年春(763、52歳)、梓州(四川省綿陽市三台県)での作。杜甫は、前年、嚴武が朝廷に帰るのを見送り、綿州(四川省綿陽市)へ行ったのだが、成都是徐知

道の乱に見舞われていて帰ることができず、梓州に移っていた。「春日梓州にて楼に登る」其の二⁰⁶⁰⁴。「天畔登楼の眼、春に随いて故園に入る。戦場今始めて定まる、移柳更に能く存せんや。厭う蜀の交遊の冷やかなるを、思う呉の勝事繁きを。応に須らく舟楫を理め、長嘯して荆門より下るべし(天の果てで楼に登って眺める眼は、つい春景色ともども懐かしい故郷の園へと入っていく。故郷洛陽はいまやつと賊が逃げて平定されたが、かつて移し植えた柳はあのままなわけがない。蜀の人たちはつきあいが冷淡なのがいやだ、呉の地方のあの風景の素晴らしさを思う。舟を整備して長く歌を唱いつつ荆門から呉に下っていこう)」。

呉は江南。荆門は湖北省宜昌県にある山。杜甫、わかい時に呉越に遊んだ甘美な思い出があり、長江を下って呉へ行きたいと詠じている。

広徳元年(763、52歳)冬、梓州・綿州の間を往来している時の作に、「老夫復た東南に征かんと欲す、波に乗り楫を鼓す白帝城(これから東南の地方へ出かけるつもりだ、楫を動かし波に乗って白帝城を通るだろう)」「(桃竹杖引贈章留後」⁰⁶⁹⁴)と、成都を出て、三峡を通り、長江を下って東南に行きたいとの思いを述べている。この東南はおそらく呉越を意識する。

広徳元年十一月の作「將に呉楚に適かんとして章使君留後兼び幕府諸公に留別す。柳の字を得たり」⁰⁶⁹⁵は、呉楚の地方へ行こうとして梓州刺史の留後である章彝及び他の幕僚たちに別れを告げた詩。呉楚は江南地方と湖北・湖南を漠然と指す。ここでも呉への思いを述べている。

ただしこの後、すぐに蜀を出て長江を下ることにはならなかった。刑部尚書となった房琯が閬州(四川省蒼溪・閬中等の県)にやってきたものが死亡したのでそれを弔いに閬州に行き、そして巖武が再び成都に赴任するというので、結局成都にもどることになる。

広徳二年春、閬州での作「遊子」⁰⁷¹⁷に「巴蜀愁い誰と語らん、呉門興香然たり(巴蜀の地での愁いは誰に語ろうか、蘇州の方に遊びに行きたい、だがその思いはあてどなくぼんやりしたものだ)」という。上に蜀の人たちの交友の冷たさと、わかい時に遊んだ呉越の地への甘美な回憶とが詠われていた。それと同じである。呉越への航行を具体的に実行しようというものではない。

広徳二年、草堂にもどった時の作「破船」⁰⁷⁴³に「平生江海の心、宿昔扁舟を具う。豈に惟だ清溪の上、日びに柴門に傍うて遊ぶのみならんや(ふだんから江海の方に遊びたいという思いを持っているので、前からここに一艘の舟を用意しておいた。浣花溪のほとりで、毎日門のそばで遊ぶためばかりではないのだ)」という。この「江海」は呉楚を指す。⁽¹¹⁾

広徳二年夏の作「絶句四首」其の三⁰⁷⁶⁴に「窓には含む西嶺千秋の雪、門には泊す東呉万里の船(草堂の窓には千年消えることのない西嶺の雪色が入ってくるし、門前には万里彼方の東呉に下る舟が泊まっている)」という。この頃、呉越に遊びたいという思いが募っている。

永泰元年(765、54歳)夏、成都を発つ時の作「蜀を去る」⁰⁸²⁵。「五載蜀郡に客たり、一年梓州に居る。如何ぞ関塞に阻てらる、転じて瀟湘の遊びを作さん。

万事已に黄髪、殘生白鷗に随う。安危には大臣あり、必ずしも涙長えに流れしめず(五年の間蜀郡に旅住まいし、一年の間梓州で暮らした。どうしていつまでもこんな所に閉じこめられているのか、向きを変えて瀟湘の地に遊ぼうと思うのだ。髪の毛がこう黄色になっては万事お終いだ、老い先は白い鷗に随って過ごそう。国家の安危の重大事は大臣たちがいらっしゃる、いつまでも涙を流していることはない)。

これは「兼濟」よりも、残余の人生を「独善」にかけようとの思いを詠じている。北帰が現実的に困難であることで、杜甫の心中には、長く押さえてきた「独善」への思いが募ってきたのである。その地理的な対象は瀟湘である、瀟湘は洞庭湖の南方だから、ここで衡陽などを含む南征が考えられている可能性はある。だが漠然と呉越の方角をも含んでいったものかもしれない。

以上には、まだ衡陽方面へ行こうとはっきりした考えは見えない。以下、成都を去って後の作。

大暦元年(766、55歳)、夔州の西閣での作「西閣二首」其の二⁰⁹⁷⁵に「懶心江水に似たり、日夜滄洲に向かう。……豪華古往を看る、服食冥搜に寄せん。詩は尽くす人間の興、兼ねて須らく海に入りて求むべし(とめどないこの思いは江の水が日夜流れて滄洲に向かうのと似ている。……古来、豪奢栄達を遂げた人もみな死んでいる、羨ましいとは思わない、薬を服食して身を幽玄の地に托したい。人の世での

詩を詠い終えたら、さらに海の世界にまで入って仙界の詩興を求めよう」というのは、夔州を去って仙境に入りたいとの願望を詠うものであり、仙道の希求と結びついた、南征に繋がる思いが次第に煮つまってきている。

大暦元年、夔州での作「悶を解く十二首」其の二¹⁰⁰⁰は、「^{ため}為に問え^{こめ}淮南米の貴賤、老夫興に乗じて東遊せんと欲す(あちらに着いたら聞いてくれ、淮南地方の米の値段はいくらかと、老いばれはいまい気分、呉越に遊びに行きたい)」と、揚州へ行く商人に語りかけて、東遊の思いを述べている。

以上のように、成都を出て夔州に着いた頃まで、杜甫は、呉越に遊びたいとの願いをしばしば語っている。だが、この思いは、以後ほとんど語られることがない。

馮至『杜甫伝』(1952年初版。人民文学出版社、1980に拠る)はいう。「江東は青年時代、漫遊した所であり、美しい思い出がある所である、彼は夔州で揚州に行く商人に淮南の米の値を聞いたこともあり、江東に行って住むことも考えた。しかし、江東のおぼと弟はいずれも久しく消息が無く、⁽¹²⁾この他には知り合いがいなかったから、そこでの生活もとらえどころのないものだった。だから、彼は荊州に止まるしかなかった」(131頁)。

3-2 仏教と仙道への憧憬

大暦二年(767、56歳)秋、夔州での作「秋日夔府詠懷、鄭監李賓客に寄せ奉る一百韻」¹¹⁵⁵の終わりには、自分の余生を「独善」に賭けて、仏教の悟りを開きたいとの思いを熱く述べる。「身は許す双峰寺、門は求む七祖禪。帆を落して宿昔を追い、褐を衣て真詮に向かわん。……他日神女を辞せん、傷春杜鵑を怯

る。……本と自ら^も ^{みずか} ^{かしよう} 迦葉に依る、何ぞ曾て^{あくせん} ^よ 僮^{てんべん} 侶に^{きつせい} 藉らん。爐峰^{てんべん} 転^{きつせい} 眇に生じ、橋井

尚お高く^{かみか} 爨げん。東走^{ちようせん} 帰鶴を窮め、南征^{ちようせん} 站^{そつせん} 鶯を尽くさん。晩聞^{そつせん} 妙教多く、卒^{そつせん} 踐

前^{ぜんけん} 愆を塞^{ふさ} がん。顧愷^{こがい} 丹青^{つら} 列なり、頭陀^{えんえん} 琬琰^ほ として鐫る。……金^{きんべい} 籠もて空しく眼

を^{けず} 刮るも、鏡^{きようしやう} 象未だ銓を離れず(双峰寺に帰依し、七祖の禪を学びたい。江陵で舟を下りたら初志を遂げるべく、粗末な褐を身にまとして仏法を修めるのだ。……そのうち巫峡の神女峰を後にしよう、晩春に蜀の望帝が姿を変えたという杜鵑が鳴き始めるのを聞きたくはない。……もとから釈迦の弟子の迦葉を慕っている。どうして仙人の僮

侶を頼むことがあろう。見渡せば香鑪峰が視界に現れ、病を癒すという漢の蘇耽ゆかりの橋井が馬嶺山の巔に見えてくるような気がする。そればかりか東に旅して丁令威が鶴に化して帰ったという遼東の地を極め、馬援が南に旅した時、鶯が暑さのために空から落ちてきたという交趾の地まで足を伸ばしてみよう。老年になって仏法の有り難さが分かり、教えを守って過去に犯した罪の責めをふさごうと思う。建康の瓦棺寺には顧愷之の絵画が並んでいるし、武昌の頭陀寺には、王巾の「頭陀寺碑」が美玉のように美しく彫りこまれている。……勇猛心を頼りとして仏法を学ぶのだ、瘦せぎすで虚弱の体質なのは仕方がない。金^{へら}の籠で眼の膜を剥がして真実を見極めようとしても、鏡の中の虚像を本物だと見間違えているようでは、俗世の思いから解脱できていないのだ)」。

「雙峰寺」は武昌の下流、湖北省蕪州黄梅県にあり、禪宗の四祖道信・五祖弘忍が住した寺。「神女峰」は夔州のすぐ下流にある巫峡の北岸の山。「爐峰」は廬山の香鑪峰。潯陽(江西省九江市)の南にある仏教の聖山。「橋井」があったという馬嶺山は郴州にある。交趾はベトナム北部。

衡陽方面に向かおうとの考えはここには出ていない。しかし、杜甫があと^{いくばく} 幾許あるかも知れない余生を仏教へのわかい頃からの志を満たすことに用いようと考えていることは明らかである。

仏教と仙道とが、ここでは仏教に力点があるが、さまざまな詩で、熱い思いを持って語られていることに注意すべきである。国家天下への献身=「兼濟」とは異なる別の世界、仏教も仙道も杜甫にとっては同じカテゴリー、実質上の「独善」の内にある。

大暦二年冬の作「懷を写す」其の二¹²⁶⁴にも「終然真如^{ちぎ}に契る、金仙の術^{あら}に匪^{あら}ざるを得んや(しまいには真如の理と契るためには、仏法の手段によるしかないのではあるまいか)」と、仏教への思いを述べている。

大暦三年(768、57歳)秋、荊南(荊州=江陵)での作。「秋日荊南にて石首の薛明府が満を持し告別するを送り薛尚書に寄せ奉る、徳を頌し懷を叙す、斐然の作三十韻」¹³³³にこういう。「南征客と為る久し、西侯君に別る初め。……煙雨巫峡を封ず、江淮より孟諸を略せん(南征して長らく漂泊の身であり、いま江の辺の西亭で君とお別れする。……いままでは巫峡に封じこめられていたが、これからは江淮の地方から北をめぐる孟諸のあたりまでゆこうと思う)」。この南征は湖南の地に漂泊すること。孟諸は今の河南省商丘の東北。これは、洛陽・長安へ北帰することをいう。だから、この段階では、まだ北帰の選択は消えておらず、衡陽方面への南征は考えていない。

馮至はこういう。荊州は「北へ行けば襄陽を経て洛陽・長安に到り、南へ行

けば潭州・桂林・広州に行くことができ、呉蜀にもつながる所だった。峽を出るにも峽に入るにも必ず経過する地だった。……しかし二月に彼が荊州に着いた時、商州兵馬使劉洽が防禦使殷仲卿を殺して謀叛、……八月には、吐蕃が鳳翔に侵攻、長安も脅威にさらされた。これらの事変により、北帰の計画を放棄せざるを得なくなったのである」(131頁)。

大暦三年(768、57歳)暮秋、公安(湖北省荊州市公安県)での作「暮に帰す」¹³⁵⁴に、南征を考えている節がある。「南のかた桂水を渡らんとすれば舟^{しゅうしゅう}楫を闕く、北のかた秦川に帰らんとすれば鼓鼙多し(南航して桂水を渡ろうとすれば舟の便がないし、北のかた故郷の秦川へ帰ろうとすれば兵乱の太鼓や鼓の音がやかましい)」。

これは二つのことを教える。一つは戦乱により北帰が困難だと述べていることである。だが、このことは多くの詩に見える。この詩で重要なのは、この時、杜甫の頭に南征が選択肢として登場していることである。桂水は湖南省郴県の西四十里、北流して永興県の境に至り耒江に流れこむ。水源を同じくする湘江のこのあたりを意識するか。ならば具体的には衡陽を考えている可能性がある。この詩ではだが、選択式で対となって表現されている。南征はこの時にはまだはっきりとした考えになっていない。

その証拠に大暦三年(768、57歳)冬、同じく公安での作「公安にて李二十九弟晋肃が蜀に入るを送る、余は沔鄂に下らんとす」¹³⁵¹というこの沔・鄂は漢陽と武昌である。杜甫は、蜀に行く李晋肃を見送るこの時、自分は漢陽・武昌に下り、漢水を溯って北帰する積もりでいる。諦めの思いが強まってはいるが、なおかつ断念してはいない。南征は心中に芽生えてはいたがまだ具体的な形を取っていない。

やはり大暦三年冬、公安での作「公安の太易沙門に留別す」¹³⁵²は、北帰ではない思いが語られている点で注意しておく必要がある。「隠居就かんと欲す廬山の遊、麗藻初めて逢う休上人。……先ず礪峰を踏み^{らん}にや^{おもむろ}を置き、徐に錫杖を飛ばして風塵を出でよ(隠居して廬山の慧遠法師のような人に師事しようとして、恵休上人のような美しい詩を作る人に初めて出会いました。……どうかあなたがひとまず先に廬山の香炉峰に登って草庵を建て、それからおもむろに錫杖を揮って俗世間を脱け出てください)」。

休上人は宋の湯恵休。恵休が詩を能くしたので太易になぞらえる。太易が廬

山あるいは、廬山に近い寺に行くので、廬山が登場するのだろう。これは実際に廬山に行くことよりも、仏法への関心を強めていることが重要である。

杜甫は長安に帰り、工部員外郎として着任して、再び天子のお側で勤めること、これこそが本願であり、北帰が切なる願いだった。しかし、病の進行と、北方が戦禍の混乱の中にあることが主な原因で、北帰の行に着けない。即ち「兼濟」の願いの実現の可能性が全く見えない。ここで、わかい頃から関心の深かった仏教への思い、精神における「独善」の一つが大きくふくらんできているのである。

大暦三年冬の曉、公安を発って岳陽に行く時の作、「曉に公安を発つ」¹³⁵⁵に「舟楫^{びようぜん}杪然此れより去らん、江湖遠く適く前期無し。門を出でて^{てんべん}転眇すれば已に陳迹なり、菓餌吾れを扶けて之く所に従わん(これから舟に乗ってここから立ち去るのだが、江湖の方へ遠く行つたとどこに落ちつく目当てもない。門を出てふりかえれば昨日の跡はもう古びている、これからは菓餌に助けられつつゆける所に行こう)」という。とにかく公安を去り、岳陽に行くのであって先のことははっきりしていない。

大暦三年冬、岳陽に向かうおりの作「劉郎浦を発す」¹³⁵⁶に「白頭漁人に伴いて宿するを厭う、黄帽青鞋^{せいあい}帰り去らん来^{いざ}(白髪頭になっては漁師と一緒に宿ったりするのはいやになった、野人として黄色の帽子をかぶり青い鞋を履いて故郷へ帰りた)」という。「劉郎浦」は今の湖北省石首市。公安と岳陽の間にある。この詩は、帰郷への思いを語っている。南征の決意はしていない。

3-3 南征の決意、仙道の追求、衡陽へ

大暦三年(768、57歳)冬、岳陽での作「岳陽城下に泊まる」¹³⁶¹に、南征の決意とその目的が明瞭に述べられている。「江国踰ゆること千里、山城近きこと百層。岸風夕浪を翻し、舟雪寒灯に灑ぐ。溜滞^{りゅうたい}して才尽き難く、艱危に気益ます増す。凶南未だ料る可からず、変化鷗鷗有り(水の国から千里もの船旅をしてきた、見ると前面の山城は高さ百層にも近い。岸から吹く風は夕べの浪を翻し、舟に降る雪は寒灯の光の前に注いでいる。南方に滞留して才能を発揮するのが難しいが、艱難

に臨んで意気ますます壮んだ。これから南征を図るのだが前途がどうなるかは分からない、莊子がいう鵬^{はらご}が鵬^{おとり}になるような不思議な変化をすることがあるからだ」。

成都を去ってからの詩の中では、最も気力に満ちた詩である。「独善」の気迫が漲っている。その中身は明言されていない。しかし、『莊子』逍遙遊に見える北方の海にいる鵬という大魚が、化して鳥となり、鵬となって南海に飛ぶ話を持ち出すからには、儒家的な考えではなく、この対極にある、世俗を絶ちきっての閑居放吟の方向にあることはまちがいない。自らの中に新しい前途を見だし、鵬から鵬へのように変化する気力が充満するを感じているのである。

このすぐ後に、ずばり南征を詩題とする「南征」¹³⁶⁵が詠われる。「春岸桃花の水、雲帆楓樹の林。生を偷みて長に地を避く、遠きに適かんとして更に襟を霑す。老病南征の日、君恩北望の心。百年歌自^{みずか}ら苦しむ、未だ知音の有るを見ず（春の岸边には桃花の季節の水が流れている、雲の浮かぶ空の下楓樹の林に沿って舟を進める。生きるためにいつも危険な地を避けている、遠方に行くのでさらに涙が流れる。老いと病で南にゆく日、君の恩を思って北を望む心。生涯、歌を唱って自ら苦しみ、知音がいるのにまだ会えていない）」。

この詩から何がわかるか。まず第一に、詩題に「南征」という、先ほどの詩よりもさらに明確に、この時、南征が決意されている。その中身は？「避地」という、この地は戦乱の地を指すだろう。北方長安・洛陽を含む。「適遠」という。「遠」とは、杜甫の故郷、北方の長安や洛陽からは遠く離れた所である。無論、漢陽・潯陽ではない、正反対の南方に行くのである。頸聯、しかしその「南征」を決断する時、同時に杜甫の心は北を望み君恩を思っている。それは哀切を極めるが、しかし、北帰と拮抗する強い別の意志が立ち上がったことを意味している。

大暦四年(769、58歳)正月、岳陽から潭州に行く時の作「南嶽に過ぎらんとて洞庭湖に入る」¹³⁶⁷は、南征の具体的な内容を教えてくれる。「洪波忽ち道を争う、岸点じて江湖異なる。鄂渚雲樹分かる、衡山舳舻を開く。……悠悠赤壁回る、浩浩蒼梧を略せん。帝子遺恨を留む、曹公壯図を屈す。……邵平元と漢

に入る、張翰^{おく}後れて呉に帰す。怪しむ莫かれ啼痕^{しげ}の数しばなるを、

（大きな波が忽ち進路を遮る、それは岸が移って大江と洞庭湖とが入れ替わるからである。北は鄂渚の方に雲や樹が分離されて残り、南方では衡山が舟の舳舻を導き寄せる。……遙かに赤壁の景が変わるのを見つ、これから遠く蒼梧のあたりまで行こうと思う。堯帝の二人の姫は舜帝に会えなかった恨みを今に遺している。曹操ほどの人も赤壁の戦いで負けて壯図を果たせなかった。……昔邵平は秦の東陵侯でありながら瓜を長安城東に作って漢の代に過ごしたが、彼のように長安にもどって隠居することはできない、晋の張翰は故郷の呉に帰ったが、私はそれもかなわない。泣きはらして涙の痕がつくのがこんなにしょっちゅうなもの不思議ではない、夜になっても他の舟の帆柱の風見鶏を目で追いかけている）。

詩題の「南岳」は、衡州の北方に在る衡山。「鄂渚」は武昌、漢陽の別称と見ればよい。それが雲と樹の彼方に隔てられている。そこには行かず、衡山に舟は引きつけられていく。「引」は巨大な魅力があることをいう。「浩浩蒼梧を略せん」という。蒼梧は、郴州・九疑山のあたり。衡陽もその北方にある。蒼梧・衡山、このあたりは杜甫の頭の中で一つながりである。

「邵平元と漢に入る、張翰後れて呉に帰す」。邵平のように長安で余生を過ごすこともできないし、張翰のように故郷にもどることもできない。張翰の句、あるいは呉越に行くこともできない、の意かもしれない。残るは南方の衡山に行くのみだ。

「怪しむ莫かれ啼痕の数しばなるを、危檣夜鳥を逐う」。葛藤はやはり激しい。上の「老病南征の日、君恩北望の心」と同じである。激しく大量に涙を流すのは、「北望の心」である。「帆柱の鳥を追って舟が進む」のは南征が決行されていることをいう。

ではここにその存在を大きく示して登場してきた衡山は一体どういう所なのか、杜甫は何に引かれて衡山に行くのか？ その答えは大暦三年(768、57歳)、夔州を出てからの作「憶昔行」¹³¹⁹に見える。「憶う昔北のかた尋ぬ小有洞、洪河の怒濤^{けいか}に輕舸過ぐ。辛勤見^{かがいくん}ず華蓋君、良琴^{ごんしん}の青輝^{せいけい}惨として么麼^{ようば}なり。……秋山眼冷かにして魂未だ帰らず、仙賞心違いて涙交^{たが}ごも墮^{こも}つ。……秘訣^{ひけつ}隱文は内教^まを須^まつ、晩歳何の功か願いをして果たさしむ。更に討^{もと}む衡陽の董鍊師、南浮^{なんぶ}

早く鼓せん瀟湘かじの舵かじ(昔、北のかた小有洞天を訪ねたことがある。そのときは小舟で黄河の怒濤を過ぎていった。ずいぶん難儀をしたが華蓋君に会うことはできず、東北の峰の青い日の光が物悲しく小さく光っていた。……秋の山を眺める自分の目には熱がなく求める人の魂は返ってこない、仙術を拝見しようと楽しみにしていたのになかなかの眼の涙がこもごも落ちてきた。……仙家の秘訣や隠文は内緒の伝授が必要、この晩年となつてはどんな工夫をすれば願いを果たすことができるだろうか。どうしても思い切れないのでもう一度衡陽におられる董鍊師を訪ねて、南方瀟湘の水に舟を浮かべて早く舵を動かしたいと思う)」。

「小有洞」は道教の聖山王屋山(河南省济源市)に在るという洞の名。杜甫は仏道に深い関心を持つとともに、それに劣らず仙道にも真剣な思いを寄せていた。わかい時、華蓋君から仙術を授かる機会を失った杜甫にとって、それを果たすことは終生の願いだったのである。

「詠懐二首」は、杜甫の衡山への思いを展開している。其の一¹³⁹¹は、安禄山の乱以来の時世の混乱と自らの不遇及び成すこともなくここまで来たことを慨嘆している。いわば「兼濟」のかなわなかった悲哀を詠っている。

其の二¹³⁹²が南征の内容に触れる豊かな内容を持っている。これは、其の一が「兼濟」篇とすれば、「独善」篇になる。「詠懐二首」其の二を二段に分けて挙げる。

其の二。「邦危うくして法則壊る、聖遠くして益ます愁慕す。飄飄たり桂水の遊び、悵望す蒼梧の暮るるを。潜魚かぎ鉤ふくを銜そろうくまず、走鹿反顧すること無し。

皦きようきよう皦ゆうこうたり幽曠の心、拳拳平素に異なり。衣食相こうがいい拘こ関す、朋知流寓に限らる。

……(国家が危難に見舞われて世の規範がくずれてしまった、今の世は聖君と遠く距たっているのですますそれが慕わしい。これから風の向くままに桂水へ行く、遙か彼方の舜の蒼梧の暮れを愁いつつ眺める。深淵に潜む魚は餌につられて釣針を咥えることはしない、山を走る鹿は後ろを振り向かずまっすぐにかけてゆく。その魚や鹿のように静かな生活を思う心がはっきりしてきた、これまでいつも国家のこののみを胸に忘れなかったのとはよほど変わってきた。ただ衣食の確保という縛りがあるのだが、流寓の身には朋友知己の数にも制限がある。……)」。

「皦皦幽曠の心、拳拳平素に異なり」は、「平素」、これまでは、国家を思い、君に拳々服膺、忠誠を誓って、即ち「兼濟」にばかり生きてきた、それとは異なり、「幽曠心」、静かな伸びやかな心、即ち「独善」を、「皦皦」、明

瞭に、慕うようになってきたの意。

「衣食相こうがいい拘こ関す、朋知流寓に限らる」。これは生活上の問題をいう。生きていくには衣食が必須であり、それを確保するには友人に頼るしかないから、これが流寓を余儀なくしているというのである。すなわち、南征の決定には、一、病で身体が衰えている、二、北方が戦乱である、ということの他に、三、わかい頃からの仙道と衡山への憧れの実現という目的があり、さらに四、生活の援助をしてくれる友人の確保が不可欠である。

一・二のために、北帰を諦めざるを得ない。この状況で、残る最晩年、「独善」に賭けようとし、その具体的な選択が衡山へ行くことになったのである。この三についてはかなり明らかになってきた。衡山が杜甫の弱年からの憧れの地であること上に見た。「詠懐二首」其の二の結びにも出ている。四、生活の支援者の確保については後述する。

「詠懐二首」其の二の後半にいう。「多憂桃源けがを汗あせさん、拙計銅柱なすに泥まん。

……葛洪及び許靖、世を避くるは常に此の路よりす。賢愚は誠とうしに等差ありて、

自おのずから合あに馳ち驚びを受くべし。……南のかた祝融の客と為り、勉強じようくして杖履みずかを親

らせん。老人星に結託して、羅浮に衰歩を展べん(憂いばかりが多くて桃源の仙境を汚すことになりはしないか、生計を立てるのが下手で今なお衡州に行けず道に滞っている。……葛洪や許靖、世を避けた人たちはみなこの道を通った。彼らとは賢と愚のちがいが歴然、自分のようなものはあちこちかけめぐる運命にあわねばならないのだ。……がんばって杖をつき鞋を履いて、南のかた衡山に行って祝融峰の客となり、南極老人星のような董鍊師を頼って羅浮山の仙洞まで衰えた脚で歩みを延ばすのだ)」。

「銅柱」は、呉の將軍程普がかつて衡州に銅柱を立てたので、借りて衡州を指す。「葛洪及び許靖、世を避くるは常に此の路よりす」、「此路」は、広東・交趾に行く道。葛洪は交趾に丹砂が出ると聞いて勾漏(広西北流東東北)の令になることを求めて、広東に至るが、結局、家族を連れて広東の羅浮山(博羅県内に在る)に入り丹薬を鍊った。許靖は、董卓の乱を避けて交趾に至った。彼らと同じような生き方を自分もするとの決意が述べられている。

最後にいう、「南祝融の客と為り、勉強して杖履を親らせん」。祝融峰は衡山の峰、ここに董鍊師がいるとの期待を持っていること上に見た。「老人星」は南方の星の名で、長寿の象徴。ここは借りて董鍊師を指す。

大暦四年(769、58歳)春の終わり、衡州が近づいて来た時の作「望嶽」¹³⁹⁴

は、衡山への憧憬を詩題に表している。先の「南征」と同じ、今こそそれが実現するとの思いが、昔年の願望を詩題にした。「南岳朱鳥に配す、秩礼百王自りす。歎 吸地靈を領す、鴻洞として炎方に半ばなり。邦家祀典を用う、徳に在りて馨香に非ず。巡狩何ぞ寂寥たる、有虞今は則ち亡し。……恭しく聞く魏夫人、群仙夾みて翱翔すと。時有りてか五峰の気、風に散ずる飛霜の如しと。牽迫脩途に限らる、未だ崇岡に杖づくに假あらず。帰来覲わくは駕を命じ、沐浴して玉堂に休せん……（南岳は天文では朱鳥の星宿に配される山で、その山の神は古代の多くの王以来貴ばれ祭られてきた。この山は神秘に満ちていて土地や山川の靈を統率し、その峰は連綿と続いて南方の半ばにまで至っている。国が祭典の儀礼を行うのは祀者の徳を現すためであり、生け贄の香りを重んずるのではない。昔、舜帝はこの嶽に巡行されたというが、それ以後はなんと寂しいことだろう、今や舜帝のような君はいなくなってしまった。……謹んで承るに魏夫人というこの岳の女仙を多くの仙人たちが取り巻いて虚空を飛び、時に五峰の気が、風に吹き散らされて霜を飛ばすように冷たいらしい。人事に縛られてまだ長旅をしないといけないので、いま高い岳に杖をついてお参りすることはできない。帰りには馬車を動かし齋戒沐浴して廟の玉堂で休息したい）」。

これは衡山の嶽廟を望める感激の歌である。「君を堯舜に致す」⁽¹³⁾ ことこそは杜甫の最大の願いだったから、杜甫がここにやってきたのは、一つには、舜帝が昔ここに巡行された地だということが大きい。これは「兼濟」の志の表現である。

後半、女仙魏夫人のことが詠われている。魏夫人は、晋の司徒魏舒の娘魏華存、彼女は幼い時から仙道を好み、後、仙女となり、南岳夫人に封じられたという。衡山は、「兼濟」と「独善」の双方に関わる神聖な山であり、憧憬の地であって、杜甫は是非ともここを訪れたかったのである。

なお「牽迫脩途に限られ、未だ崇岡に杖づくに假あらず」とは、恐らく、生きるために急ぎ立てられるように知人を求め頼らねばならないことをいう。

「嶽麓山・道林二寺行」¹³⁹⁵ は仏教への関心を強く示す。ただし、これは上の詩「望嶽」¹³⁹⁴ よりも前、大暦四年(769、58歳)春、潭州に着いた時の作。杜甫は、わかい時から仏教にも深い関心を持っていた。潭州の名利に詣でて、感動するのは当然のことだろう。重要なことは、杜甫において、仏教も仙道も、また呉越への思いも、精神に於ける「独善」として、これらはひとつの連鎖する存在であったということである。

この仙道・仏教への希求が南征への思いを強めつつあった所に、南方に生活

の支援者が現れた。

3-4 生きるために

大暦四年(769、58歳)夏、おそらく衡州での作「韋大夫之晋を哭す」¹³⁹⁸ は、杜甫の南征の理由の一つを示す重要な作品である。「悽愴なり郇瑕の邑、差池す弱冠の年。丈人礼数を叨りにす、文律早く周旋す。……貢は喜ぶも音容間たる、馮は招かるるも疾病纏う。南過倉卒たるに駭く、北思愴として聯綿たり。……童孺交遊尽く、喧卑俗事牽く。老来涕涙多く、情在り詩篇を強う。……（郇瑕の村のことを思うと悲しくなります、二十歳の頃いっしょに遊びましたね。あのころあなたは過分に私を礼遇し、詩作のおつきあいをしてくださいました。……あなたが高位におられると貢禹のように喜ぶ、そんな気の置けない間柄でしたが、あなたの音容とは隔たってしまいました、私は朝官に任ぜられはしたものの馮唐のように老いさらばえ病につきまわっています。あなたを慕って衡陽に来ましたが突然の訃報に驚くばかりです、北を望んであなたを思って悲しみは連綿と続いています。……私には少年の頃からの知り合いがいなくなりました、俗事に引かれて煩わしいつまらないことばかりが多いのです。年老いてからは涙もろく、ことにあなたへの情は深く気力をふりしぼってこの詩を詠じました。……）」。

「郇瑕」は古代の晋の地、今の山西省臨猗県の西南。杜甫、二十歳前にここに遊び、韋之晋と知り合ったのである。「貢は喜ぶ」の「貢」は漢の貢禹で、杜甫になぞらえる。『漢書』卷七二「王吉伝」に「王陽(吉が名、字が子陽)位に在るときは、貢公(名が禹)冠を弾く」とあるのに基づき、友の榮達を心から喜ぶ間柄であったことをいう。「馮は招かるる」は、左思「詠史八首」其の二の

「馮公豈に俤れざらんや、白首まで招されず」の「馮」と「招」を合わせたものの。「馮」は漢の馮唐(『漢書』卷五〇に伝がある)。

これによれば韋之晋は蜀の刺史だったものが、衡州の刺史として赴任してきた。衡州刺史だったのは、大暦二年から大暦四年の二月、潭州刺史を銘ぜられるまでである。韋之晋は潭州に到着後間もなく死ぬ。そこで、杜甫はこの詩を書くことになった。「童孺交遊尽く、喧卑俗事牽く」は、杜甫が韋之晋に生活支援者として大きな期待を抱いていたことを示すだろう。

杜甫が衡陽に南航するのを決断した直接の理由は、陳尚君がいうように、韋之晋が衡陽の刺史だったからであり、この韋之晋に生活の支援を求めためである。⁽¹⁴⁾ 衡山への憧憬と、韋之晋を生活の支援者として頼ること、この二つが杜甫を、南征に向かわせた。だが、杜甫は、韋之晋の死によって、せつかく来た衡州に留まることはできなくなってしまった。

この間の事情について、馮至はこういう。「彼が衡州に行ったのは、もともと郇瑕にいた時に知り合い、今は衡州刺史である韋之晋を頼るつもりだった。ところが、衡州に行く途中、韋之晋が潭州刺史に改められたので、彼は舟を下りたばかりで、頼りにしていた人と別れねばならなくなった。それに韋之晋は潭州に着くとすぐに、四月の内に死んでしまった。杜甫はこの障碍にぶつかって、この年の夏には衡州を離れたのである」(134頁)。

こうして、杜甫は、韋之晋⁽¹⁵⁾を頼ることができなくなり、衡山の廟にも参ることなく、潭州にもどった。

大暦四年秋、潭州での作「楼上」¹⁴⁰²。「天地に空しく首^{こうべ}を搔く、頻りに抽く白玉の簪。皇輿は三極の北、身事は五湖の南。恋闕肝肺を勞す、掄材杞桮に愧^ぬず。乱離に目^{みずか}ら救い難し、終に是れ湘潭に老いん(天地の間であって空しく頭をかきむしり、しきりに白玉の簪を抜く。吾が君のお乗りものは東西南の三極の北にあり、私の生涯は五湖の南で図るしかない。宮闕を慕いはしても身体を弱らせている、人材を選ぶとなると、柳にも樟にも及ばないのではと恥じるばかりだ。乱離の中で自分一人さえ救うことができない、終に湘水の潭で老いてしまうのだろう)」。

五湖は、具区・洮滸・彭蠡・青草・洞庭だが、ここは「三極」との対の関係で「五湖」とした。洞庭湖を指す。杜甫、北帰はあきらめ、ここで暮らしていく気になっている。

「盧五丈参謀瑀に贈り奉る」¹⁴⁰⁶にもいう。「未だ解かず依依たる快^{たもと}、還た藪^ままん^{はん}泛^{はん}たる瓢^{ひさご}。流年蟋蟀^{しつしゆつ}に疲る、体物幸いに鷓鴣^{たいぶつ}。孤負す滄洲の願ひ、誰か云う晩に招かると(懐かしい快を分かつたうちは、またみなみと酒をたたえた瓢をくみかわしましょう。私は年の移りゆく間に蟋蟀の鳴き声を聞くのに疲れてしまいました、幸いにミソサザイというお手本があるからそれにあやかち暮らしています。滄洲の仙境に行きたいのにその願望に背いているのです、郎官に招かれたのが遅かったなどと誰がいうのでしょうか)」。

鷓鴣は、『莊子』逍遙遊に「鷓鴣は深林に巣くう、一枝に過ぎず」とあるのにより、鷓鴣のように住む所がある、粗末な居処であってもなんとか暮らしていることをいう。生きること、そのための衣食の確保、これと仙道への志を果たすこと、これがこの頃の杜甫の現実の課題だった。

この頃、滄洲、仙境への思いはさらに深まっている。大暦四年(769、58歳)秋、潭州での作「幽人」¹⁴¹⁸。「往^きに恵詢が輩と、中年滄洲の期あり。天高くして消息無し、我を棄つる忽ち遺るるが若し。内には懼る道流に非ずして、幽人に瑕疵とせられしかと。……名を知らるるは未だ称するに足らず、局趣たり商山の芝、五湖復た浩蕩たり、歳暮れて余悲有り(前に恵詢らと、中年ながら滄洲の仙境に行こうと約束していた。天高い秋となって消息は全く無い、私はもう見放され忘れられたのだろうか。心中懼れている、お前は道教の徒ではない、おれたちにはそぐわない傷だと思われているのではないかと。……商山の四皓は世俗に縛られている、彼らが名を知られているのは何ということはない。洞庭湖はみなみと水を湛えている、君らのことを思って悲しみは尽きない)。悲しみが尽きないのは、恵詢等に導かれて仙道の追求することできないからである。

「重ねて劉十八弟判官を送る」¹⁴⁰⁸に「他日江に臨みて待たん、長沙の旧駅楼(いつの日か江に臨みながら君と再会するのを待っている、長沙のこの駅の楼で)」という。長沙で余生を送るつもりだ。

「盧十四弟侍御が韋尚書の靈櫬を護して上都に帰るを送る二十四韻」¹⁴¹²には当時の生活実態を見ることができ。杜甫の生活を詠じる最後の段。「空裏^{くうり}懸えて字を書す、山中疾^やみて薇^{わらび}を采る。杯を撥^{よう}して要^や忽ち罷む、被を抱きて宿するに何れにか依らん。眼冷やかに征蓋^{たす}を看る、児に扶けられて釣磯^{ちようき}に立つ。

清霜洞庭の葉、故^{ことさら}に別時に就きて飛ぶ(時事を憂え不運を嘆いて晋の殷浩のように空中に字を書き、病にかかりながら山中で薇をとって食べている。もうこうして宴に招かれることもないと思ひ杯を払いのける。これからは誰を頼りに夜具を抱えて共に寝ればいいのか。力のない目で君の乗る車の覆いを見つつ、子供に助けられて釣り磯にたたずむ。霜の置く洞庭湖畔の木の葉は、別れの時をわざわざ選んで舞い散り、私の悲しみを深めるのだ)」。

大暦四年冬、潭州での作。侍御史盧某が、潭州に着任するや亡くなった尚書韋之晋の柩を護送して長安へ帰るのを見送った詩。殷浩は晋の將軍だったが、

軍事での失敗を咎められて庶民に落とされ流された。彼は毎日空に向かって「咄咄怪事(チェツチェツ、わけが分からん)」と四文字を書いていたという(『世説新語』黜免篇)。

船上生活であり、まともに泊まる所もなかった。山中で薇を取って食糧にしている。極貧の生活である。

生活の困窮は次の詩にも見える。「暮秋、裴道州が手札を枉ぐ、率爾に興を遣りて寄せ、^{ちか}通く蘇渙侍御に寄す」¹⁴¹⁴。「久客多く枉ぐ友朋の書、素書一月に凡そ一束。虚名但だ寒暄の問いを蒙る、泛愛救わず溝壑の辱(長らく旅の身である私は友人からたくさん手紙をもらい、一ヶ月におよそ一束の手紙がたまる。虚名を得ているためにその人々から尋ねられるのは時候の挨拶ばかり、お世辞の愛では溝にのたれ死にしてしまう辱めにあうのを救いようがない)」。

「泛愛」は博愛の意。大暦三年、江陵に到着の後、杜甫の詩に現れる。「行くゆく古城店に次りて江に汎かぶ作、鄙拙を揆らず江陵の幕府諸侯に呈し奉る」¹³⁰⁶に「王門徳業高く、幕府才賢盛んなり。行色多病を兼ね、蒼茫たり泛愛の前(陽城郡王の王門は徳業が高い、だからその幕府には才能ある人がたくさんおられる。私は旅の身である上に多病、前途は茫漠としており博愛の諸氏に期待するばかりです)。「王門」については原注があり、「江陵節度、時に陽城郡王に封ぜらる、故に王門と云う」とある。ここは博愛の心を持つ幕府の諸公を指す。

「王使君が宅に宴して題す二首」其の二¹³⁴⁹に「泛愛霜鬢を容れ、留^{りゅうかん}飲夜間を卜す(あなたは博愛の方で私のような鬢に霜の置いた老人を仲間に容れてくださった、夜の閑な時間を選んで私を引き留めて喜ばしてください)」という。王使君はおそらく荊州の人で、近くのいずれかの州の刺史。その生活が隠者のようだど敬慕の念を示し、宅に招かれたのを感謝している。これも、生活支援を期待しての詩である。次いで上の詩があり、さらに大暦四年秋、潭州での作「李八丈曠判官に贈り奉る」¹⁴¹⁵に「所親淹泊を問う、泛愛衰朽を惜しむ。衰白南翁を辞せん、

委身北叟を希^{こいねが}う(親しい人から長い舟の生活について尋ねられる、また博愛の御仁が私が老い衰えているのを惜しんでもくださる。南方の老人と同じような白髪は私もなく潭州を辞して、遙かな北方の故郷に向かっていきたいと思っています)」という。

これも年長者の李曠判官とその友人たちに向けて世話をしてくれたことへの感謝を述べる詩。素直にとればそうだが、鈴木虎雄⁽¹⁶⁾が「お世辞に自分を愛してくれる人人はじぶんの衰朽を惜しんでもくれる(しかし、それがなんになる、なんにもならぬ、だから)わたくしは垂白の身を以て南方の父老のところから辞し去り、一身を運命に任せること塞翁のようにありたいとねがうてをる」(第4冊766頁)というのは、「泛愛」の句の意味について正鵠を穿っているかもしれない。鈴木が「北叟」を塞翁が馬の翁とするのは、詳注に班固「幽通賦」に見える「北叟」が「塞上の翁を指して北叟と為すなり」とするのに拠る。

詳注は「南を辞し、北を希^{こいねが}うは、公將に北帰せんとす」と「北」に重点を置いての解釈をしている。拙訳はこれに従った。そうかもしれない。しかし、続く潭州の詩で、なおかつ仙道への希求を詠っているから、鈴木のように解するのがいいのではなからうか。北帰の決意はいま少し後になされる。

やはり大暦四年(768、58歳)の冬、潭州での困窮と孤独を詠ずる詩「雪に対す」¹⁴²²。「北雪長沙を犯し、胡雲万家を冷やす。風に随い且つ葉に間わり、雨を帯びて花を成さず。金錯囊^{のうつ}罄くるに垂^{なん}んとするも、銀壺酒^{おぎの}餘り易し。人の浮蟻^つを竭くす無く、待ちて昏鴉^{こんあ}に至る有り(北風に吹かれて舞う雪がここ長沙を犯し、北方から来た雲が全ての家を冷やしている。雪は風に吹かれて、舞い散る葉とまじりあい、雨を含んで雪の花にならない。財布には金錯刀が尽きかけているが、銀の壺の酒はついで買うことができる。ただ酒はあっても共に飲み尽くす人はおらず⁽¹⁷⁾、待っているうちにカラスがねぐらに帰る頃となった)。「金錯」は金錯刀。漢の王莽が鑄た錢の名。

次の詩は仙道への思いを示す。大暦五年(770、59歳)春、潭州での作。ふたまたいとこの子である王砮が南海に使いするのを送った詩。「重^{ちようひ}表^{ひょう}姪王砮^{つおうれい}事^しの南海に使いするを送る」¹⁴³⁰、その最後の段。「我れ丹砂に就かんと欲し、跋涉身の勞するを覚ゆ。安^{いずく}んぞ能く糞土^{ふんど}に陥らん、志^{げいごう}の鯨鼈^{きやう}に乗らんとする有り。或いは鸞を驂として天に騰らんとし、聊か鶴の鳴皋^{めいこう}を作す(私はあの葛洪のように丹砂を取りに行つて嶺南に留まりたいと思う、もう山河を旅するのも疲れを感じる。どうしてこのうらぶれた土地に零落したままでいようか、鯨と海亀に乗つて海上

に出ようと思うのだ。あるいは鸞に乗って天に翔け昇ろうと思う、そこで君への送別の気持ちとしてこの鶴の鳴き声をあげたのだ」。北帰を実質あきらめ、人生最後は、わかひ時の憧れだった仙道に耽るつもりである。葛洪が丹砂を錬ったのは羅浮山。上掲「詠懐二首」其の二¹³⁹²にも見えていた。杜甫は、その具体的な地を意識するのではなく、仙道の追求を語っている。

「蕭十二使君に贈り奉る」¹⁴³³も困窮の救済を訴えている。以前は杜甫と同じく蜀の嚴武に仕え、現在では湖南地域の州の長官になっている蕭十二に贈った詩、大暦五年(770)春、潭州での作。関連部分を挙げる。「含香の舎に曠絶し、伏枕の辰に稽留す。驂を双闕に停めしことは早く、雁を五湖より廻らす春となる。達せず長卿の病み、従来原憲の貧しきに。監河に貸粟を受ければ、一たび轍中の鱗を起たしめん(尚書省とは本当に長いあいだ遠く隔たったままで、病床の日々を送ることが続いております。馬を宮門に止めたのは随分と前のことで、今は春を迎え洞庭湖から雁が北に向かって帰って行く時となりました。あなたはご存知ないでしょうが、私は司馬相如と同じ病気を患っており、また相変わらず原憲のような貧乏暮らしをしております。監河侯が食糧を貸すように私の貧窮をお救い下されば、あたかも轍の中であえぐ魚がたちどころに生き返るようになるに違いございません)」。

「長卿」は前漢の司馬相如の字。彼は消渴(糖尿病)を患っていたという。ここでは杜甫が自分の病気をいったもの。「原憲」は孔子の弟子。彼が清貧に甘んじていたことが『莊子』讓王篇に見える。杜甫自身の貧窮を喩える。「監河侯」の二句は、『莊子』の故事を用い、杜甫が貧窮生活を救ってくれるよう蕭使君に求めたことをいう。その故事はこうである。莊子が貧窮に苦しみ、監河侯に食糧を借りに行くと、監河侯は年貢を納入してから貸すといった。すると莊子は、轍にたまった水の中で干物になりそうな鮒は、わずかの水でもいいから今すぐ欲しいのですと言った(外物篇)。杜甫、蕭十二使君に米をねだっている。

大暦五年(770、59歳)春、潭州での作「二十三舅録事^{さいい}崔^{せつ}韋が撰に郴州^ゆに之くを送り奉る」¹⁴³⁴は、杜甫の母方のおじ崔韋が郴州に赴任するのを見送っている。杜甫は再び衡州に行った後、衡陽から郴州に行こうとするのだが、それはこの

叔父を頼ってのことである。なお詩中「永嘉多く北より至る、勾漏且に南征せんとす(今は六朝の永嘉の時代に貴族が北から南へ来たと同じような時代だ、あなたは葛洪が行った南方勾漏に向けて旅立つ)」とあるのは、崔韋が郴州に赴任するのは葛洪が勾漏に行くほど遠くないの意で、杜甫の仙道への思いを示すものではないだろう。⁽¹⁸⁾

3-5 郴州行とその断念、北帰

杜甫が衡陽に再び行った時の作「衡州に入る」¹⁴⁴⁵。大暦五年夏、臧玠^{ざうかい}の叛乱が起こったので、これを避けて衡陽に行ったのである。その最終段に、崔韋を頼って郴州に赴こうとの杜甫の思いが述べられている。「橘井地宅旧り、仙山^{きつせい}舟^ふ航を引く。此の行暑雨を怨むも、厥^その土清凉と聞く。諸^{しよきゆう}舅符を剖ちて近く、緘を開けば書札光る。頻繁に命ずること屢々及び、磊落たり字百行。江総は外家に養われ、謝安は興に乗ずること長し(郴州には橘井が漢の仙人の蘇耽の旧宅に古びて遺っており、彼の祭壇がある山は私が乗る船を誘う。それは暑さと多雨を怨む不快な旅だが、あちらは涼しくさわやかと聞いている。おじの崔偉どのが近ごろ郴州刺史を務められ、寄こして下さった書状の封を開けると目に眩ゆく耀いた。何度もこちらへ来いとのご命令を繰り返され、たくさんの文字で綴られた百行ものお手紙だった。むかし江総が母方の親族に養われたようにおじの世話になるのはありがたく、郴州に行けば東晋の謝安と同じく山水の美と詩文の制作にいつまでも長く興じていたい)」。

なぜ郴州に行くのか。「橘井地宅に旧り、仙山舟航を引く」。「橘井」は、「秋日夔府詠懐寄奉鄭監李賓客一百韻」¹¹⁵⁵に既出。郴州が仙道に縁の深い地だからである。「此の行暑雨を怨むも、厥の土清凉と聞く」、涼しくて、自分の身体を労ってくれそうだからである。「頻繁に命ずること屢しばに及び、磊落たり字百行」、おじの崔韋が何度も懇篤にやってこいと勧めるからである。そういう所だから、郴州ではきっと、江総が母方の家で養われたように、謝安が山水を楽しんだように安らかに暮らせるだろう。

だが杜甫は、洪水のために耒陽で足止めされてしまい、終に郴州に行くことはできず、北上することになる。

この未陽で作った詩が「^{じようらいよう}轟 未陽、僕が水に^{はば}阻まるるを以て、書もて酒肉を致し、饑えを荒江に療^{いや}さしむ。詩、懐に代うるを得、興は本韻に^つ尽く。県に至り、轟令に呈す。陸路方田駅を去ること四十里なり。舟行すれば一日なり。時に江の漲るに属し、方田に泊す」¹⁴⁵¹である。

馮至はいう。「彼は郴水を溯って未陽の県境に入り、江の水が漲るのを見て方田駅に停泊し、五日の間食物を得ることができなかった。未陽県令の轟某はこれを知ってすぐに手紙を書き、たくさん酒肉を贈っている。……だが水の勢いは衰えないので前進することはできず、轟県令に直接お礼の詩を渡すことがかなわないまま、舟の向きを変えてまた衡州にもどっていくしかなかった。……轟県令は杜甫がきつと洪水に溺れ死んだのだらうと思ひ、この詩人を記念して、未陽県の北に遺骨の無い墳墓を建てた。この^{から}空の墳墓のために、杜甫が何日も飢えて、轟県令が贈った白酒と牛肉が届くと、痛飲飽食をしてその晩に死んだという伝説が生まれた。……荒唐無稽である。実際には、杜甫は洪水に阻まれて郴州に南下することができず、計画を変えるしかなかったのである。彼は北上して漢陽に行き、漢水に沿って長安に帰ろうと思った。計画は計画に過ぎない。貧窮と疾は杜甫から湘江を出る能力を奪っていた。秋から冬にかけて、杜甫の小舟はただ湘江に浮かんでいただけである。長期の水上生活のために、風痺の病はいよいよ激しく、彼は船中に寝こんで、三十六韻の長篇「風疾舟中……」を書いた、これが彼の最後の作品である」(137頁)。

郴州に行くことができず、北に楫を向けて以後、生活の見通しは全く立たず、仙道への憧憬も、それを願望として表現するのは「洞庭湖を^よ過ぎる」¹⁴⁵³に「湖光天と遠し、仙槎を泛かべんと欲す(湖面に輝く陽光は天の彼方に源がある、仙人の筏を浮かべてそこに往きたい)」というのが最後である。

杜甫は余命を振りしぼって北帰を目指す。大暦五年夏の作「棹を廻す」¹⁴⁵²は襄陽に赴くつもりであることを述べている。杜甫は、襄陽の涼しさに恋い魚がれている。「清は思ふ漢水の上^{ほとり}、涼は憶う岷山の^{おも}巔^{いただき}。……^{こうしなんじ}篙師爾^が送るを煩わす、朱夏寒泉に及べ(涼しさについては襄陽の漢水のほとり、岷山のいただきのことを憶う。……船頭さんよ、ご苦労だが早く送っておくれ、真夏の暑うちに冷たい泉を汲めるとありがたい)」。

大暦五年秋、北帰途中での作「舟に登りて^{まさ}將に漢陽に^ゆ適かんとす」¹⁴⁵⁴。漢陽・

襄陽を目指している。「生理飄蕩に拙なり、有心^{たが}遲暮に違ふ。中原戎馬盛んなり、遠道素書稀れなり。塞雁時と^{とも}与に集まる、^{しやうう}檣鳥終歳飛ぶ。鹿門此れ^よ自り往

き、永く漢陰の機を^お息めん(漂泊の間に生計を立てることが下手で、心に期する所は

あったのだが晩年に成し遂げることができなくなってしまった。中原では戦乱が収まらず、身内も友人も遠い所にいて手紙が来ることはめったにない。北方からやってくる雁はここに集まり、舟の帆柱の風見の鳥は年中飛んでいる。これからは鹿門山に行つて、

『莊子』に登場する漢陰の老人のように世俗の雑念を捨て去ってしまおうと思う)」。

万が一可能なものならば、洛陽・長安にもどりた。せめて襄陽にたどりつきたい。他にもう選択肢は無くなった。生活の支援者はおらず、身体は弱り、仙道の追求もできない。「有心」は、長安にもどることと、仙道の希求の両方を含むだろう。そのどちらをも果たすことができなかった。仙道の追求も生活が保ててのことだ。

大暦五年秋の暮れ、潭州での作「暮秋、將に秦に帰らんとして湖南の幕府の親

友に留別す」¹⁴⁵⁵。「水は^{ひろ}闊し蒼梧の野、天は高し白帝の秋。^{みち}途窮^{なん}す那ぞ哭する

を免れん、身老いて愁いに^た禁えず。大府才能会す、諸公德業優なり。北帰雨雪

を^つ衝く、誰か^{あわれ}憫^{ちようきゆうやぶ}まん貂^を裘蔽るるを(湖南地方には水が広く横たわっている、白帝

城のあたりも秋になって天が高い。道が行きづまっては どうして阮籍のように哭せずにおれよう、身が老衰しては愁いに堪えない。湖南の役所には才能のある人が集まっている、諸君はみな才も徳も優れた方々。私はいま雨雪をついて北の方長安に帰るのだが、

この^{てん}貂のかわごろもの破れているのを誰が気の毒がってくれるだろう)」。

「途窮す……」は、阮籍が車を走らせて行き止まりにぶつかるどと大声で鳴き叫んで引き返したという故事(『晋書』四九「阮籍伝」)に拠る。「貂裘蔽る」は、蘇秦の主張が秦王に採用されず、黒い貂の裘が破れて家に帰ったところ、妻は機から下らず、嫂は炊がなかったという故事(『戦国策』卷三秦策一)に基づく。

杜甫は潭州を發ち、岳陽付近まで来て湖上で亡くなった。直接の原因は、北に上がってきて寒さにやられたためである。⁽¹⁹⁾

まとめに代えて

杜甫が、仙道の追求と生きるためのために生涯の最後の時間を用いたことは、彼の絶筆「風疾に、舟中枕に伏し懐を書す、三十六韻、湖南の親友に呈し奉る」¹⁴⁵⁷によっても明らかである。その最後の一節。「戦血流れて旧に依る、軍声動きて今に至る。葛洪^し戸^と定めて解けん、許靖^た力^た任え難し。家事と丹砂の訣と、成る無くして涕^{なみだ}霖^なを作す(戦場の血が流れているのは以前と同じだし、軍の声がざわめいているのは以前から今まで続けている。葛洪はきつと戸^{しかばね}が解け仙人になって天に上ったのだ、許靖は家族を率いて無事に他方へ避難させた、だが私は許靖のように家事を行うことも、葛洪のように丹砂を鍊る秘訣を我が物にすることもできなかった、涙が長雨のように止めどなく流れる)」。

杜甫の人生は、その最期の二年弱、北帰、「兼濟」の実行が不能である状況において、病を推しての生きるための必死の航行と、わかい頃からの憧憬だった仙道の追求、「独善」に献げられた。これほどの逆境に在っても、杜甫は「兼濟」と共に、多年心中に対立しつつ併存していた「独善」の願いを果たそうと、懸命の努力を行ったのである。

拙文は、白居易の確立した「兼濟」「独善」の観念が、明確な概念とはなっていないにしても、実質上、杜甫の精神にも存在しており、それが、最晩年の南征の行動にも深く影響していることを論じた。諸賢の批正をいただければ幸いである。

注

- (1) 陳尚君「杜甫離蜀後的行止析一兼論杜甫之死一」(『畏敬伝統』、復旦大学出版社、2011 所収。以下「陳論文」)。石井理訳「杜甫離蜀後の行跡に関する考察—ならびに杜甫の死について—」(『生誕千三百年記念杜甫研究論集』、中国詩文研究会松原朗編、2013)
- (2) 以下、杜甫のテキストは『杜詩詳注』(以下、詳注)を用いる。編年も詳注に拠るが、一部、従わないことがある。詩題に付す四桁の数字は『杜詩詳注』収載作品に掲出順に施した作品番号。近刊『杜甫全詩訳注』(講談社学術文庫、下定雅弘・松原朗等編著)はこの番号により各種テキストの作品検索の便を図っている。
- (3) 詳注は、まず趙(次公)注「白馬潭、潭州に在り」を示すが、続けて「顧(宸)注、岳州巴陵、白馬湖有り」、『水経注』等、岳陽北方に位置する説をも挙げている。近時の研究では、樊維綱「杜甫湖南紀行詩編次詮釈」(『文学遺産』1982 年 3 期、1982)が、岳

州府説を採り、杜甫は大暦三年冬、岳陽に到着、李白の友人である裴隱の計らいで臨湘県北十五里に在る白馬磯で休息、ここで春節を過ごし、大暦四年春、暖かくなった時に南行を決意したのだという(45 頁)。今、詳注が「潭州を発つ」1384 の次に配しているのを尊び、潭州に在るとの説に従う。

- (4) 瘡については小高修司「杜甫疾病攷」(『中唐文学会報』16、2009)を見られたい。
- (5) 小高同上論文(6 頁)は、「春復た肺氣を加う」(『寄薛三郎中瓊』1097)の「肺氣」は生理的用語で、単に肺炎を言うのではなく「肺瘡」とみなすべきであり、瘡病だという。
- (6) 韓成武・張志民『杜甫詩全訳』(河北人民出版社、1997)が「江泡、指成都附近的錦江」(638 頁)というのに従う。
- (7) 「[女宅]女新裏縈る、丹砂旧秤冷やかなり」(『寄劉峽州伯華使君四十韻』1156)とある。「[女宅]女」は水銀の別名。
- (8) 戦乱のために故郷の破壊が悲惨な状況であること、中原の戦局については、陳論文(21 頁、訳 158 頁)をも見よ。
- (9) 陳論文 16 頁・訳 148 頁、21 頁・訳 157 頁を見よ。
- (10) 近時の論考としては、劉明華「仏教と杜甫及晩年思想」(『西南師範大学学报・人文社会科学版』27-5、2001)・劉宝「杜甫漂泊西南時期的仏教思想与山水詩創作」(『江淮論壇』2007 年 4 期、2007)が仏教への傾倒を考察し、毛炳南「從杜甫湖南詩歌看其晩年思想」(『草堂』1982 年 2 期、1982)が儒を「主幹」とし、仏・道を「枝葉」とする論を展開していて有益である。
- (11) 杜甫には 18 例の江海が見える。江海が吳楚を指すのは、「風塵為客日、江海送君情」(『送元二適江左』0668)・「平生江海興、遭亂身局促」(『南池』0723)・「弧矢暗江海、難為遊五湖」(『草堂』0739)・「平生江海心、宿昔具扁舟」(『破船』0743)の 4 例である。「非無江海志、蕭灑送日月」(『自京赴奉先詠懷五百字』0129)も吳越を意識する可能性がある。
- (12) おぼと弟が会稽他の江東に居ることは、「舍弟穎が齊州に赴くを送る三首」其の二 0787 に「諸姑今海畔、兩弟亦た山東」と見える。弟妹及びおぼとの連絡が途絶えたことについては陳論文(21 頁、訳 159 頁)にも言及がある。
- (13) 「奉贈韋左丞丈二十二韻」0035・「可歎」1269・「暮秋枉裴道州手札率爾遣興寄遞呈蘇渙侍御」1414 に見える。
- (14) 陳論文 22 頁、訳 160 頁。
- (15) 杜甫と韋之晉との交遊を示す作はもう一首「韋中丞之晉の湖南に赴くを送り奉る」1396 がある。詳注はこれを、大暦四年二月、衡州で韋之晉が潭州刺史に赴任するのを見送ったものとするが、浦起龍は兩人が湖南にいるのに「赴湖南」はおかしいとして、これを夔州での作としている。陳論文 22 頁(訳 160 頁)及び注 5 を見よ。
- (16) 『杜甫全詩集』(日本図書複製版、1978)。もと、『杜少陵詩集』(国民文庫刊行会、

杜甫における「独善」—最晩年の「南征」をめぐって—（下定）

続国訳漢文大成文学部、1928-1931）。

(17) 詳注が「酒有るも朋無し」（2033 頁）というのに従う。

(18) 『杜甫詩全訳』1241 頁に拠る。

(19) 陳論文第五章に詳しい。